

しいたけのさいばい

一九三三年のこと、大分県のしいたけさいばい地、阿蘇山の西ふもとにある山村でのできごとである。この辺の農家は田畑にとぼしいので、広葉樹・針葉樹の森林を利用して、炭焼きや、しいたけさいばいを副業にして、かろうじてくらしをたてていた。

すぎ林の木立を通して朝日がきらきら光を投げている下に、一万本に近い、長さ一メートルほどのまるたぼうが組みならべてあった。その前に、みすばらしい身なりのひとりの農夫が、手を合わせて拝みながらつぶやいていた。



額〇 経済

「なばよ出てくれ。おまえが出んば、おれが村から出て行かんばならんでな。」このいのりをふと聞きつけて、じっと見つめている大学生があった。森喜作さんである。森さんは、農村経済の実態調査のためこの部落をおとすれ、海拔五、六百メートルの所で、リュックサックをおろした。額のあせをぬぐって、ふと林の中に目を移したとき、この情景を見たのであった。森さんは、ふしぎに思っつて農夫に事情をたずねた。

2

徳川

徳川時代の初め、九州の人、炭焼きげんべえが、炭材として切ったならぬ木にたくさんのしいたけがはえたのを見て、人工さいばいを思いついた。ならやくぬぎのまるたの表皮になたてきざみ目を付け、数千本もならべてほうっておくのである。このまるたをほだという。すると、どこからともなく風

表皮

に乗って飛んで来たしいたけの胞子がほだのきざみ目に付いて、二、三年もするらしいたけが出て来る。

△俵
○採る
○資金
○危険

ところでほだ材は、直径五センチメートルから十五センチメートルほどのならやくぬぎを、長さ一メートルに切ったまるたである。これを、そのままかまに入れて焼くと木炭になる。そこで、原木を焼いて木炭にするか、ほだにしてしいたけをさいばいするか、どっちがもうかるかが村民の頭をいためるところだ。原木一石からは木炭二俵半が焼ける。ねだんは木炭一俵が、ほしいたけにして三八〇グラムくらいだ。ほだ材にして約一キログラム以上のしいたけが採ればいいわけだ。しかし、木炭とちがって、ほだ材は数年たたないらしいたけが採れないから、資金をねかさなくてはならない。おまけに、運は風にまかせろという、いわば危険な「かけ」である。

実際には、原木一石から七・五キログラムのほしいたけが採れることが

△借金
○税金
△悲しき

ある。そのときは大もうけができるけれど、ほだに種が付かなかつたらたいへんである。貧しい農夫は山のような借金で、税金はもちろん、米を買う金さえ無いようになる。村をにげ出し、一家がばらばらになるといような悲げきが起こるかもしれない。農夫がいのついていたのは、こうしたことがあるからであった。

△投機

森さんはこれにむねをうたれた。一生をしいたけと共に生きようと決心した。そして、このような投機的な方法でなく、確実に収かくできる道を考え始めた。それが農民の貧しさを無くす一つの方法と考えたからである。

△製造

以来十年間、森さんは研究に熱中した。そして一九四三年、ついにその望みを達した。それはたねごまの製造であった。たねごまをほだに打ちこみさえすれば、確実に、原木一石から五、六キログラム以上のほしいたけが採れるのである。

では、たねごまとはなんであろうか。どうして作るのだろうか。

にわか雨に会った小人が、あわててきのこの下に飛びこんで雨宿りをしているかわいらしいまん画がある。全く、きのこは太った雨がさのようだ。その太いえを持ってひっくり返してみると、厚いかさのうらにびらびらしたひだが、えを中心に、放射状にびっしりとならんでいる。そのおくにきのこの命の精がひそんでいる。しいたけの場合も同じである。

子孫

そこには胞子という一個ずつの細胞がいく百万も育ち、やがて地上に子孫を



培養

残す種として、風に乗る日を待っている。

開ききつたしいたけのかさを軽くたたくと、目には見えない胞子が落ちる。これをシャーレに受け、かんでんで培養すると糸状にのびる。しかし、この胞子にはおすとめすがあって、かたほうだけではしいたけを作らない。多くの胞子のなかで、同性ははなれ、異性が引き合って結合する。この結合がなければしいたけははえない。だから、ほだにしいたけがはえるためには、おすとめすの二つの胞子が同じ場所に付かなくてはならない。ますますぐうぜんを待つことになる。

異性

森さんはこの結合した胞子をたくさん作り、その中にしょうぎのこまに似たくさび形のこまを入れ、そこに胞子を移した。これがたねごまである。だから、たねごまをほだに打ちこめば、必ずそこからしいたけがはえるわけだ。初め、種はおがくずに付けた。しかし、だれも相手にしてくれない。ほだ

にあなをあけ、いちいちおがくずをおしこむ手数をかけるのがいやなのだ。たねごまにすると、なた一丁でほだに切り口を付け、くさびを打ちこめばいいし、ふたの必要もない。これなら飛びつく。

4

増[△]産

一九四六年から、農林省はしいたけ増産五か年計画をたてた。その結果、一九五二年には、ほしいたけ二千七百トンを生産し、うち、千五百トンを輸出し、売り上げは二十億円に達した。

補[○]う

しいたけは栄養素を多分にふくみ、特に保存のきく点は貴重である。むかしから、しいたけは日本食の栄養を補い、国民の保健に大きな役わりを果たしてきた。そして、このたねごまによるさいばいは、いく十万人の山村の貧しい農民に有利な副業をあたえているのである。